世界動物文学全集

5

界動物文学全集

5

講談社

世界動物文学全集5　果てしなき追跡
鳥たちをめぐる冒険

昭和54年3月16日　第1刷

著者　D. P. マニックス
W. H. ハドスン

訳者　藤原英司
黒田晶子

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112
電話東京（03）945-1111（大代表）　振替東京 8-3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定価　1500円

©藤原英司　黒田晶子　1979年
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
0397-405058-2253（0）　（文2）

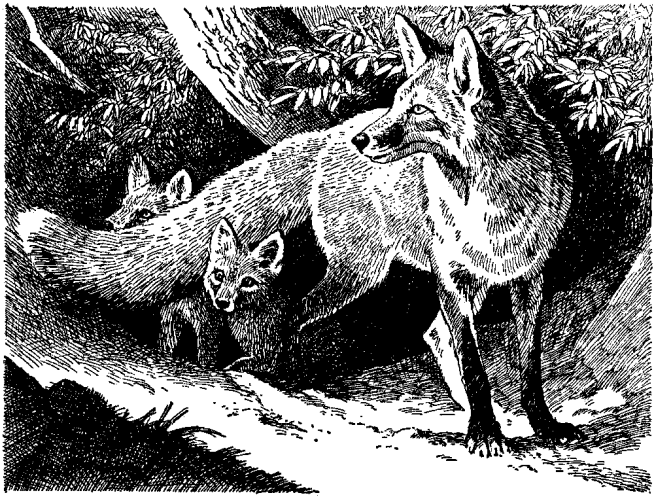
目次

果てしなき追跡　5
鳥たちをめぐる冒険　219
解説・藤原英司　395

装幀　蟹江征治

イラスト　田中豊美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



果てしなき追跡

D・P・マニックス
藤原英司訳

THE FOX AND THE HOUND

by

Daniel P. Mannix

Copyright © 1967 Daniel P. Mannix

Japanese translation rights arranged with Harold Matson Company, Inc. New York
through Japan UNI Agency, Inc.

1　猟　犬

大きな雑種のブラッドハウンドが一頭、樽でつくったイヌ小屋の中で眠っていた。イヌは今、シカ狩りの夢を見ていた。いままでいろいろな獲物を追いかけたが、シカが一番おもしろい獲物だった。しかしシカを追うことは、ふだん、きびしく禁じられていた。シカを追いかけて鞭で打たれ、棍棒でなぐられたことがある。しかも、おしおきとして横腹に散弾まで浴びせられた。そのくせ、一度は、ずいぶん長く歩いたあと、家からずっと離れたところで、シカの跡をつけさせられたこともあった。

今、猟犬は夢の中でふたたびシカを追跡していた。獲物の臭いはだんだん強く濃厚になってくる。主人が吹きならす角笛の音が聞こえる。ぶおー、ぶおー、ぶおーというテンポの早い角笛の音は〝進め〟という意味だ。その音を聞くと猟犬は興奮してわんわんと吠えた。今や猟犬は走っているのではなく、地面の上を飛んでいた。獲物の臭いはますます強くなってくる。もうシカの姿が見えてもいいころだ。

イヌは樽小屋の中で横になったまま、けいれんしたように四肢を蹴り動かし、思わずじれたような鳴き声をあげた。

そのときイヌは、どこか遠くのほうでおこった物音をぼんやり聞いた。だがその音はあまりに遠かったので、ほとんどイヌの意識にのぼらなかった。だが物音はしだいに大きくなり、どうにも耐えがたいまでになった。

その物音というのは動物の叫びだった。

「きゃっーん、るるるる！　きゃっーん、るるるる！」

何度も何度も同じ声が、くりかえし聞こえた。

猟犬は夢の中でその声を追いはらおうとした。よけいな物音に気をとられないで、シカを最後まで追いつめたかった。だが、そのかん高い叫びは、いやおうなしに猟犬の意識にはいりこんできた。輝かしい追跡の夢はしだいに色褪せ、かわりにいらいらするような鋭い叫びが大きく夢の領域をおかしはじめた。その叫び声といっしょに、すごい臭いがただよってきて、今までのスリルに満ちたシカの臭いは、たちまち圧倒されてしまった。

猟犬は吠え声とも唸り声ともつかぬ叫びをあげて、ぼかっと夢からさめた。だがイヌは自分がどうなっているのかわからぬらしく、しばらく小屋の中に身を横たえたままだった。だがすぐに、つんとするようなキツネの臭いをかぎつけた。相手はどこかすぐ近くだ。その時、さっき夢の中で聞いたあざけるようなかん高い叫びが聞こえてきた。

猟犬はとたんにすさまじい怒りの吠え声をあげると樽小

屋からとびだし、夜明けの薄明かりの中へ走りだした。
小屋からほんの一、二メートルのところに、キツネが腰をおろして薄笑いを浮かべていた。猟犬はすっかり頭にきていたので、ろくに考えもせず、めくらめっぽう目の前の敵にとびかかっていった。だがキツネは動かない。
猟犬はあとひと息で、ぷんぷん臭いを放つ赤色のおせっかい屋にくいつくところだった。ところがその時、イヌは突然なぐり倒されたように地面にひっくりかえり、固い地面に脇腹をしたたか打ちつけた。イヌは自分をつないでいた鎖の端までかけだしていって、ふいにうしろへ引き戻され、その場に転倒したのだ。
そのころ、あたりはいっそう騒がしくなった。仲間の猟犬や、気の荒い雑種の狩りイヌが目をさまし、てんでに鎖の延びきるところまでとびだしてきて、狂ったように吠えだしたのである。
キツネはとがった三角形の頭をちょっとかしげるようにして、薄笑いを浮かべ、イヌたちを眺めている。キツネは自分が安全だということを知っているのだった。
そのうちにキツネはさっきの猟犬のほうへむいて、いかにもあざけるように、かん高い叫びをあげた。イヌは完全に頭にきた。自分が鎖につながれているのもかまわず、また力まかせにとびだしていって地面にころがり、鎖をふりきろうと、足で鎖を引っかいて、狂ったような悲鳴をあげた。キツネは同じところに腰をおろしたまま、ころげまわるイヌをおもしろそうに見ている。
キツネはイヌがつながれている鎖がどのくらいの長さかということを、ちゃんと知っていた。それを知るのは簡単だった。おのおのイヌ小屋のそばに、小屋を中心にして扇型に地面が踏みならされた線ができていた。その線が境で、イヌはみんなその線より外へでることはできなかったのである。キツネはそのことを知っていて、イヌをじらすのがおもしろくてたまらなかった。だがキツネは、もう吠えるのをやめていた。吠えていると、イヌたちの騒ぎがいいのことが何も聞こえないからだった。キツネは今、黙って腰をおろし、自分がつくりだしたイヌたちの大騒ぎを、ひとりほくそえんで楽しんでいた。
やがて車のヘッドライトが、丘の斜面をなでるように照らし、キツネの姿も照らしだした。一瞬キツネの姿は内部から光を発したように、明るく輝いた。すると急にキツネは今までの自信に満ちた余裕のある態度を失った。その顔からは、今までの、ひとを小ばかにしたような薄笑いが消えうせた。キツネは身をかがめ、自分の背後に下っている小道のゆくてをうかがった。そこには、下のほうに、ぽつんと一軒小さな家が建っていた。
その時、つづいて第二の車のヘッドライトがキツネを照らし、キツネはいっそう体を低くした。イヌたちの騒ぎはますます激しくなり、キツネはこそこそとその場から逃げだした。それもできるだけ早く光のあたらないところへ逃

れようとかけだしながら、すぐにナラの灌木の茂みへもぐりこんで姿を消した。

狂ったような叫びを最初にやめたのは、シカ狩りの夢をみていた猟犬だった。ほかのイヌたちはみんな凄い声で騒いでいたが、その猟犬は、車の音を聞いて、それが飼い主の車だということを、はっきり聞きわけたのである。そしてつづいてすぐ、第二の車の音も聞きわけた。その車は、時どき飼い主の家へくる男たちが使っているものだった。その男たちがくると、猟犬はいつも仕事をいいつかる。

その猟犬は雄だった。車については音を聞いただけで、六台ぐらい判別することができた。だが目で見たのでは、一台も区別できなかった。

今のこの第二の車がくると、猟犬はいつも、ある男の跡をつけるように言いつけられる。かれは人間の足跡を追うことをあまり好まなかった。臭いはいつも稀薄で、追跡しおえても、最後につきとめた相手を殺すことはなかったからである。かれはほかの狩りイヌのように血に飢えているわけではなかった。だが追跡の最後に銃声がとどろき、獲物が倒されてその死臭をかげるというのは、ぞくぞくするほど楽しいことだった。それが味わえないのはつまらない。だがそれでも、鎖につながれているよりは、はるかにましだった。猟犬は期待に胸をふくらませながら、尾をふって、車のほうを見つめた。だがその尾のふりかたは、ややあやふやだった。ひょっとすると主人たちは自分に用がないかもしれないという気もしたからである。

猟犬は車が二台とまって、中から男たちがでるのを見た。そのうちの一人は飼い主の主人だと思った。しかしだいぶ離れているので、よくわからない。猟犬の目は近眼だったからである。

男たちはまず家の中へはいったが、やがて出てきて、丘の斜面をかけのぼりだした。イヌたちはまた吠えだした。今度の吠えかたは、警戒と期待が半々に交じりあったものだった。

男たちがそばへくると、猟犬は、一番先頭にいるのが自分の主人だということがわかった。それは姿よりも、歩きかたでわかった。猟犬はうれしくなり、体をくねくねよじりはじめた。

主人は太い革のベルトを身につけていた。さらに長い皮紐をもっている。これは今から人間の足跡を追うということだった。主人といっしょにでかけるのはその猟犬だけで、あとの連中は、みんなおいていかれるようだ。猟犬はうれしさと得意さですっかりうちょうてんになった。そして地面に腹ばいになり、首をねじまげて主人の前に自分の頸静脈をさらしながら、しきりにこびるようなしぐさをした。これはイヌが相手にとりいろうとする時のしぐさで、その猟犬にとって、主人は自分より強い動物として意識されていたのだった。

主人は猟犬の体を軽くたたきながら、いろいろな言葉と

いっしょに、〝コパー〟という言葉を口にした。コパーというのはその猟犬の名前だった。猟犬はほかの言葉はわからなかったが、そのコパーという言葉だけはわかった。そのほかの言葉は、意味はわからないながら、優しい響きをもっていた。

コパーはその言葉の響きに力をえて、あと足で立ちあがり、主人の胸に前足をかけた。仲のいいイヌにいつもしているように、主人の顔をなめようと思ったのである。主人はうれしそうにしながらも、顔をそむけた。そして主人はイヌの首についている鎖をはずし、かわりに、もってきた皮紐を猟犬の首輪にとりつけた。

コパーはすぐに車のほうへ進みだした。コパーははじめのうち、全体重をかけて皮紐を引っぱろうとはしなかった。だが、主人が、持っている皮紐の端を自分の太いベルトの鳩目穴にぱちっとはめる音を聞くと、全力をあげて紐を引っぱりだした。同時に主人も、車のほうへ急ぎだした。

ここにはチーフという名のトリッグ・ハウンドが飼われていた。優秀な追跡犬で、勇敢な戦士でもあり、主人のお気にいりのイヌだった。だがコパーは、そのチーフというイヌが嫌いだった。それはちょうど嫉妬ぶかい女が、すばらしい女性を憎悪する気持ちに似ていた。だからコパーは今も、主人がチーフをいっしょに連れていくかもしれないと思って、できるだけ早く主人をほかのイヌから離れたところへ連れていこうとしたのである。

コパーは車のところへたどりつくと、ちょっととまどった。主人はその時によって、いろんな車にコパーをのせたからである。

主人はいっしょにいる二人の男に話しかけた。コパーは最初会った時、皮のすねあてをしているその二人の男が誰かということを、すぐ見分けた。その二人とは、前に何回かいっしょにでかけたことがあったからである。主人はベルトにつないだ皮紐をはずさないで、自分の車のドアをあけた。そしてコパーに乗れと命じた。

コパーはすぐ早く車にのりこみ、運転席のすぐうしろにつくりつけた特別席にとびのった。のってしまうとコパーはその席に腹ばいになり、しっぽでばたばたと、さかんに床をたたいた。だがその尾のたたきかたには、まだいくらか不安なようすがあった。ひょっとすると主人は、あの呪わしいチーフを連れにいくかもしれないという気がしていたからである。

だがその心配は無用だった。主人はすぐ車にのり、エンジンをかけた。車が動きだすとコパーは初めて心からくつろぎ、尾をふるのをやめた。もうチーフのことは心配しなくてよかった。

やがて車が舗装されたハイウェイへでると、うしろについていた車が前へでた。そして屋根の上にひらめく光を点滅させながら、もの悲しげな唸りをあげてスピードをだし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめた。同時にコパーが乗っている車もスピードをました。

コパーは走っている車の窓から首を突きだして、風を口いっぱいに吸うのが好きだった。とくに車が加速する時は風圧が高まり、口をあけていると、両肺に空気がいっぱい吹きこまれて、まるで酔ったような気持ちになる。だが窓から首をだすことは禁じられていたので、開いている窓から入ってくる風を吸うことでがまんした。

コパーは静かに体を横たえたまま、濡れた大きな鼻孔に、風を吸いこんでいた。そのうちに車の規則正しい振動が神経をにぶらせ、コパーはとろとろとまどろんだ。

やがて車は舗装した道をはずれ、がたがたの砂利道にはいって、ぼんぼんはねだし、コパーは目をさました。あたりはすっかり明るくなっていた。コパーは狭い座席で、できるだけ体をのばして、大きなあくびをした。先を走っている車は、さかんに砂ぼこりを巻きあげながら、まだ走りつづけている。そのほこりが舞いこんできて、コパーはくしゃみをした。そしてコパーは片方の前足で鼻面をおおって、ほこりをよけた。

やがて車は二台ともとまり、人声が聞こえた。コパーは立ちあがった。長い間同じかっこうをしていたので疲れてしまった。なんでもいいから早く外へでたかった。そのうちに、主人がドアをあけてくれた。コパーはとびおりて、そばの藪に放尿し、やっとひと息ついた。

あたりには人間がたくさんいて、みんななにかしゃべっていた。コパーはあたりをかけまわって新しい臭いを嗅いだ。それから立ちどまって、ふちのとがった草を少したべた。車にのったため、少し吐き気を覚えていたからだった。

やがてコパーは主人の怒った声を聞き、びっくりして主人の顔を見た。なにか叱られるようなことをしたのかと思ったのである。だが主人はコパーに言ったのではなく、家からでてきた男の一人になにか言ったのだった。その男は手になにか持っていた。主人はその男が持っているものをつまむようにして受けとると、それを持ってコパーのところへやってきた。そしてコパーの鼻先へそれを突きだして、臭いをかがせた。コパーはそれが臭いの見本だなと思った。つまりコパーがこれからあとを追う人間の臭いがそれなのだ。

コパーの鼻先へだされたのは布だった。コパーは注意深くその臭いをかいだ。何人かの人間の臭いがする。その布を持ってきた男の臭いと、主人の臭いがまじっている。主人の臭いはべつに問題なかった。コパーはいつもかぎなれているその臭いをすぐにほかの臭いと区別し、無視することができた。だがほかの人間の臭いは、どれがだいじな臭いなのかわからなかった。

主人はコパーの首輪に追跡用の紐をつけ、コパーは仕事にとりかかることになった。やがて、主人が持つほうの端

が、主人のバンドの鳩目穴にぱちんとはめこまれ、コパーは出発した。そのへんにいた男たちは、みんなぞろぞろとあとからついてきた。だが主人はすぐに大声でみんなを叱りつけ、一人だけついてこさせて、あとはみんな立ちどまった。それをみてコパーはほっとした。いっしょについてくることになった男は、例の皮のすねあてをつけた男のうちの一人だった。その男は、コパーや主人から一メートルほど遅れてついてきた。

主人はコパーをつれて、その家のまわりを大きく輪を描いてまわった。コパーはゆっくり歩いた。いろいろ異なった臭いが押し寄せてくる。それをかぎわけながら進んだ。ウサギやリスのような動物の臭いがする。コパーはそういう臭いを無視した。ときどき野生のカラシやハッカの茂みのそばをとおった。そういうところでは、その植物の強い臭いが、ほかの臭いをいっさいおおいかくしてしまうように思われた。だからそのような茂みがあると、コパーは臭いをじゃまされないように、茂みをずっとよけて通った。コパーは二度空地を横切った。そこでは熱い日光が、ほとんどの臭いを干上がらせてしまっていた。コパーはそういうところでは、かすかな臭いを見失わないよう、注意深く鼻を働かせた。

やがてついにコパーは、はっきりした人間の足跡をかぎつけた。コパーはすぐその場にたちどまり、長い間、大きく息を吸いこみながら、臭いをかいだ。それから主人のところへもどって、臭いの見本をもういちど、かがしてもらった。主人はさっきの布をさしだし、コパーはそれをかいでみた。

そうだ。いくつもの臭いのうち、同じ臭いがある。しかも一番強い臭いだ。コパーはもうためらわなかった。はっきりと確信をもって現場へもどり、さっそく追跡にかかった。

木がたくさん生えているところでは、地面は湿っていてつめたく、臭いはよく保存されていた。コパーはどんどん進んだ。時には主人を引きずりそうになることがあった。コパーは低くたれさがった大枝の下をくぐることができたが、主人は猟犬のようにそういうところを早く進めなかったからである。

コパーは時どき臭いを失った。だが二、三メートル以内で、ちゃんとまた臭いをとることができた。しかしところどころで獲物は急に方向をかえていた。しかもそういうところでは、臭いは乾いた地面に深くしみこんでしまうか、あるいは風で吹きとばされてしまっているかしていた。コパーは臭跡を失ってまごついた。すると主人はその前に臭いがはっきりしていたところへ、もう一度コパーを連れていって、そこからやりなおさせた。

コパーはゆっくり地面を嗅ぎ、ごくわずかな臭いを捕らえる。そしてつぎつぎとそういうかすかな臭いをたどって、ふたたびそろそろと進みだした。一ヵ所どうにも臭い

がとれないところがあった。そこでは、コパーは地面を掘って臭いを捜した。臭いは地表から三センチも深いところへ沈んでしまっていた。また別のところでは、臭いは完全に吹きとばされていた。しかしコパーは倒木の下にその臭いの痕跡が残っているのをつきとめた。

やがてかれらは、土ぼこりの道へでた。獲物はそこで休んだらしく、臭いは非常に強かった。たばこの臭いもした。だが臭跡はそこで消えていた。コパーはその場所の周囲をぐるぐるまわって、たしかめてみた。それからコパーは片足をあげて小便をした。それは獲物が消え失せたというサインだった。

コパーは若かったので、獲物の臭いが消滅するところまで、ずっと休まずに追跡してきた。そして今やっと小便をした。同時に主人はその意味を悟った。小便をするという行為は、主人とコパーの間で暗号のような役目をはたしていたのである。

主人は皮のすねあてをした男を呼んだ。男はそばへきた。そしてコパーが休んでいる間、主人とその男はなにか話をした。なにしろ長い追跡だったので、コパーはすっかり疲れて、のどが乾いてしまった。

やがて主人がコパーのそばへやってきた。主人は帽子をとり、その帽子のふちの上へ、水筒から水を注いだ。コパーはそれを夢中になって飲んだ。それから主人はコパーの鼻を水で洗ってくれ、足をマッサージしてくれた。それがおわると、皮紐をしゅっとひとふり波型にふって言った。

「さあ坊や、もう一度やれ。臭いを捜すんだ」

コパーは責めるような目つきで、主人の顔を見上げた。臭跡はここでおわりだということを、ちゃんとサインで主人に知らせたはずだ。ところが主人は、まだ追えという。

コパーは、はっきりそれとわかるようなため息をついて立ちあがり、そのへんをもう一回調べてみた。だがいくら調べてもまちがいはない。臭いはたしかにここでとまっていた。コパーはどうしたらいいだろうかと思った。

ここまで追ってきた臭いは消えたが、今そこには自動車の臭いが残っていた。金属製の機械が個々に独特の臭いをもっているように、ガソリンやオイル、タイヤなどにも固有の臭いがあり、コパーはそれを嗅ぎ分けることができた。そして、どうしても今、なにか臭いを追わなければならなくて、ほかに追うべき臭いもないとすれば、そこに残っている車の臭いのあとを追うほかない。

こうしてコパーは、車の臭跡を追いだした。太陽のため熱くなった道路は、足の裏にこたえた。しかし、車の臭いをつけていくことは、今までよりずっと楽なことだった。

だがコパーはすぐに、ほとんどの臭いが道路面から吹きとばされて、道端の草の葉にひっかかっていることに気づいた。草はまだところどころに露があって、臭いの粒子をひっかけるのに、おあつらえ向きの罠になっていた。さら

にここでは、太陽熱が臭いの粒子を地面から十数センチのところへ浮きあがらせていた。だからコパーは頭をさげないで、臭いをたどっていくことができた。

しばらく進んだところで、コパーは道ばたにふたたび男の臭いをかぎつけた。新鮮なものではなかったが、臭いははっきりしていた。臭跡は森の中へつづいている。コパーはさっそく皮紐をひっぱりながら、熱心にそのあとを追っていった。

そのうちに主人がぐいと皮紐をひっぱり、皮のすねあてをつけた男といっしょに地面へかがみこんで、しきりになにか見つめた。コパーはさっそく主人のそばへ行ってみた。主人たちはなにか白いものを見つけていたが、それは強いタバコの臭いがするだけで、人間の臭いはほとんどしなかった。だからコパーはすぐにうんざりして、もとの人間の臭跡のところへもどった。

主人はその白いものを見つけたことによって、ひどく喜んでいるようだった。そして、しきりにコパーをほめ、元気づけた。コパーはすっかりうれしくなり、ふたたび元気よく足跡を追いはじめた。

丘の斜面にそって足跡を追ううちに、やがて鋭いぎざぎざの岩ばかりがごろついている場所へでた。そこでは太陽の光が、じりじりと岩場に照りつけていた。ここへ来るとコパーは臭跡をとることができなくなった。臭いがなくなっているのだ。コパーは主人を引っぱりながら、斜面を上ったりおりたりして、なんとか臭跡を発見しようとつとめた。

ここではコパーは小便をして主人に合図をするようなことはしなかった。こういう場所で人間の臭いが突然消えるということなどありえない。それをコパーは知っていたからである。臭跡はここで、さっきの道路での時のように突然終点になっているわけではない。むきだしの岩の上につけられたため、熱気で消滅したのだ。だから臭いはどこかにあったはずである。だから、もしコパーが、いったん印された臭いをとれない場所があるとすれば、それは、まさにこういうところだった。

主人はコパーを引いて岩場から離れたところへ行った。そして今回の追跡が始まっていらい、初めて皮紐をコパーの首輪からはずした。それは追跡中止の合図だった。

コパーはうれしそうに体を横たえ、血のでている足の裏をなめた。岩場の鋭い岩で、足の裏を傷つけたのである。コパーは満足していたわけではない。とちゅうで臭跡を見失ったことを残念だと思っていた。だから、しばらく休息したら、また追跡をやりなおすつもりだった。

主人と皮のすねあての男は、コパーを休ませておいて、さっきの岩場をゆっくり歩きはじめた。そのうちに二人はなにかを見つけたようだった。コパーは立ちあがり、痛む足をひきひき、男たちのそばへ行ってみた。主人はある場所を指さしている。コパーは、なにかあるのかなと期待に

もえてその場所へ鼻をさしだした。だが主人はコパーにさがれと命じた。コパーは鼻を動かしてみたが、べつに臭いはなにもなかった。主人はふたたびもどれとコパーに命じ、コパーは柔らかい土のある場所へもどった。

男たちは岩が崩れおちているガレ場を登りはじめた。とちゅうでひんぴんと立ちどまりながら、ふうふういって登っていく。コパーはそれを見ながら、どうして自分が臭いを捜せないのに、人間たちに臭いの跡がわかったのか、ふしぎでならなかった。

主人はガレ場の上へでると、コパーを呼んだ。コパーはガレ場をよけながら、斜面をのぼって主人たちに追いついた。主人はふたたび引き綱をコパーの首にはめ、

「さあ坊や、行け。臭いを捜すんだ」

と言った。

コパーはさっそくあたりをかぎまわってみた。そこには確かに、また臭いがあった。主人がどうしてそこに臭いがあることをつきとめたのか、コパーにはわからなかった。コパーはその理由をとくに考えてみようとはしなかった。人間はイヌには理解できないふしぎな力をもっているものなのだ。

よく訓練された猟犬は人間を追跡する時、けっして声をたてない。だがコパーは夢中になると、思わずくんくんと鼻を鳴らしてしまう。新しい臭いをかぎつけて、体の大きなコパーは、すぐ主人を引きずるようにして進みだした。主人はたまりかねて文句を言ったが、コパーは興奮していたので、そんなことにはおかまいなく、どんどん先を急いだ。

今や、進むにつれて、臭いはだんだん強くなった。かなり新しい臭いである。コパーが勢いづいて進んでいくと、とちゅうで突然、引き綱をぐいと引っぱられた。男たちは上のほうを見上げている。コパーも同じほうを見てみた。しかし目にはいるものは、なにもなかった。主人はつれの男と低い声で話していた。それから主人はまたコパーに進めと命じた。

臭いははっきり残っていた。コパーはシャクナゲの茂みとサルトリイバラの藪を突きぬけて進んだが、ここは主人と連れの男には、だいぶつらかったようだ。そのうちに、かれらは森の中の小さな峡谷へでた。コパーは谷底に水の臭いをかぎつけた。

コパーは峡谷の底へくだりだした。ここでは、臭いの状態はとても悪かった。閉ざされた谷間では、空気の流通がわるく、臭いは深く沈んでしまっている。コパーは鼻面を地面にすりつけるようにして、臭いをかいだ。

やがてコパーは頭をあげて、鼻に吸いこんだごみを勢いよく吹きだした。その時、コパーは突然、石のように動かなくなった。コパーは足もとの臭跡を無視して、空気の臭いを注意ぶかくかいだ。

たしかに臭う。追跡してきた人間の臭いがする。それも

近い。どこか近くにいると、空気の臭いが告げている。同時にコパーは、その人間が死んでいるということを知った。重くよどんだ甘ずっぱい死の臭いが強くする。そこには、また血の臭いも交じっていた。

コパーはもう地面の臭跡はかえりみず、いきなりけわしい谷間の斜面をくだりはじめた。主人と男は尻もちをついて滑りながら、コパーのあとを追った。

谷底には澄んだ流れがあった。コパーはのどがかわいていた。しかし立ちどまって水を飲もうとはしなかった。すぐに水しぶきをあげて流れにとびこみ、むこう岸へあがった。主人と連れの男はコパーのあとを追って流れを渡りながら、とちゅうです早く両手で水を何回かすくって飲んだ。

コパーたちが対岸の斜面をのぼっていくと、ゆくての藪の中で激しい葉ずれの音がおこった。同時に六つほど黒い影がひらめき、大きな羽音とともに、すすけたような大きな翼が、ばさばさと空気をあおいで、つぎつぎと空中へ舞いあがった。あとには、屍臭があたりに満ちた。

コパーはその悪臭を無視して、先へ進んだ。そして、ひと息、大きく息を吸いこむと、その場にしゃがみこんだ。追跡してきた獲物は、いま目の前にいた。

主人はコパーの首から引き綱をはずした。そして連れの男といっしょに、前方に横たわっている死体のほうへ進んでいった。一瞬わーんという音とともにアオバエの群れが死体から舞いあがった。しかし、すぐにまたもとのとおり、死体にたかった。

コパーの鼻には、いろんな臭いが押しよせた。血の臭い、鳥の臭い、それから今までつけてきた人間の臭いや屍臭などだった。それからコパーは、全然べつの臭いをかぎつけて、立ちあがった。それは荒々しい野性の血をかきたてるような臭いだった。コパーは思わず首の毛を逆だてた。恐怖と興奮のため、激しい戦慄がコパーの体内をつきぬけた。

クマだ！　それは野生のクマの臭いだった。

コパーは主人たちにはおかまいなく、臭いのするほうへとびだしていって、熱心にあたりをかぎまわりはじめた。クマだということはまちがいない。そしてその臭いから、クマは足に血をつけていたこと、猛烈に激怒していたことなどを読みとった。コパーのこの判断はすぐ正当だったことが立証された。クマが興奮のあまり小便をした場所がみつかったからである。臭いの強い小便が多量にふりまかれていた。それはまちがいなく、ひどく腹をたてた獣が放尿する時の特徴を備えたものだった。

コパーはもう人間の跡を追っているわけではなかった。だからコパーは、今なら声をだしてもいいと思った。そこで底深い声で、つづいて短く区切ったあえぐような吠え声をあげた。

すぐに主人がそばへやってきた。コパーは主人に自分が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com